

# 日高山脈の魅力と ファンクラブの活動

たかはし・たけし  
埼玉県生まれ。立正大学  
(自然地理学)卒業後、北  
海道に移り日高町教育委員  
会に社会教育主事として勤  
務。日高山脈ファンクラブ  
を設立、事務局を担当。

高 橋 健

## 本文の趣旨

自然を売り物にしながらも、日本でもっとも開発行政を進めている北海道にあって、日高山脈は日本の中で原始性を有する優れた自然のひとつです。しかし、開発は山の奥深くまで進んでいます。日高山脈の自然を市民の手で次世代に引継いでいくために「日高山脈ファンクラブ」が設立され、活動をはじめました。

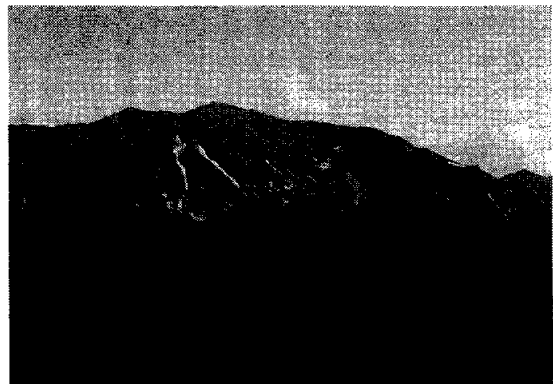
## 1 はじめに

日高山脈は、十勝岳の南にあるサホロ岳から襟裳岬まで約一四〇kmにわたって続く日本を代表する長大な山脈のひとつです。「写真①」「写真②」日高山脈では和人による開拓以降、山に広がる原生林を切り林業が栄え、また水力発電所、鉄道や道路建設によって山麓の町は発展してきました。その後は日本各地の山村同様、森林資源の枯渇や資源の海外からの流入により産業が衰退し、急激な人口減少が続いています。しかしながら常に山や川は開発の対象となり公共的な開発事業が途切れなく続けられています。

一方で、北海道は「観光立県」として「雄大な、原始的な自然環境」を売りにして国内外から観光客を誘致しています。日高山脈の帯も同様です。しかし、果たして山麓に住む者が、日高の自然の魅力を感じ、原始性を残したいと思っているのでしょうか。住民の意識が開発一辺倒から変化しているとは思えません。それは山村の生活が開発事業に依存していることが一因と考えられるからです。



写真② ポロシリ岳登山のメインルートは川の渡渉を繰り返して山荘にたどり着く。(ヌカピラ川)



写真① 最高峰ポロシリ岳「北カール」深田久弥の日本百名山として登山者が増えつつある

山村の生活基盤として自然と共存しながら成り立つ産業(生業)を育てていけない限り、開発問題は解決しないと考えます。

日高山脈の自然を次世代に引継いでいくためには、住民も登山者も研究者も「市民」という共通の立場で学習し、体験し、行動していく事が必要です。その中から自然と共存できる産業や生活を考えていきたいと思ひ、二〇〇〇年五月「日高山脈ファンクラブ」を立ち上げました。

この報告では、日高山脈の自然の魅力と開発、そしてファンクラブの活動とその方向性についての私見を述べたいと思ひます。

## 2 日高山脈の自然の魅力と開発

### (一) 自然の特異性と魅力

山脈の最高峰はポロシリ岳(アイヌ語で大きい山)の二、〇五二mであり、それほど高くない山々です。

また山麓にはアイヌ民族が暮らし、彼らのさまざまな伝説が残り、ほとんどの山や川の名前はアイヌ語に由来しています。

日本の多くの山が火山活動によってつくられたなかで、日高山脈はヒマラヤ山脈と同様にプレートの衝突によってつくられた珍しい山脈です。現在の夕張付近にあった陸地(西)に千島列島付近から移動してきたプレート(東)が衝突し山脈になったといわれています。このため左右が非対称になっており、東側は十勝平野から急激に孤立し、西側は延々と山並みが続いています。地層が反転し、ふつう地上で見ることのできない地下深くの岩石を観察できる非常に貴重な山なのです。そのため地球のなぞを調べるために海外からも多くの研

究者が訪れています。

また植物にとって有害な成分が含まれる岩石もあり、特異な高山植物が生育しています。

氷河期には主稜線の東側に二十数個のカルがつけられています。氷河期の生き残りといわれるナキウサギが低山から最高峰まで分布し、生き続けます。またヒグマやエゾシカといった大型動物も暮らししています。

一部の山を除くと登山道や標識は整備されておらず、自然の原始性を求める全国の登山者に「日本の残された秘境」と呼ばれ、憧れの山々として多くの人びとを魅了しています。

このように特異な自然景観と多くの動物が暮らす山脈がありますが、山深くまで原生林は伐採されています。森林伐採など開発をしようまのな山脈中央部とアポイ岳、襟裳岬周辺が「日高山脈襟裳国定公園」として、さらに主稜線周辺が「日高山脈中央部森林生態系保護地域」に指定されています。国定公園としては日本最大の規模(約一〇万ha)を誇っていますが、自然の優位性を考えると国定公園レベルの管理(都道府県が管理)で良いのか考えさせられます。

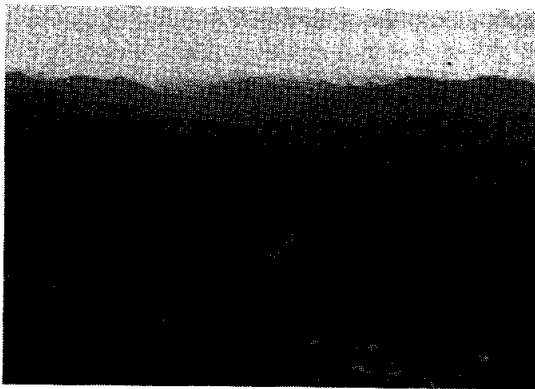
### (二) 日高の資源と開発

今から一五〇年前の日高山脈はアイヌ民族の狩猟場でありました。しかし明治以降、日高の針葉樹の原生林は紙の原料として注目され伐採されていきました。植民地を失った戦後、加速度的に伐採はすすみ、ふもとの町には営林署が置かれ、多くの製材やチップ工場がつくられていきました。そしてわずか一〇〇年で「無尽蔵な森林資源」といわれた麓そうとした原生林は消え去りました。

また北海道開発のため日高地方中西部の河川には水力発電用に多くのダムと発電所がつくられ、山の奥地に向かって森林伐採と電源開発のための道路が伸びていきました。ポロシリ岳の頂上直下に見える湖はダム湖なのです。「写真③」

水量を確保するため小さな沢にさえ取水ダムが築かれ水路トンネルで結ばれてしまい、沢の水量は激減してしまいました。

このように日高山脈は、日本発展のための「資源供給地」としての役割を果たしてきたのです。また山脈を東西に結ぶ道として北から狩勝峠・日勝峠・天馬街道・黄金道路があります。山脈特有のもろい地質帯を通る日勝峠では毎年改修工事が続けられています。また高速道路網として札幌・苫小牧と帯広を結ぶ道東自動車道や苫小牧と日高



写真③ 山奥の水力発電用のダム湖ダムまで管理用の林道が伸びている(幌尻湖)

地方・帯広と南十勝地方を結ぶ高規格道路の建設も着々と進んでいます。

このように開発尽くされた感がありますが、山麓には目的のはっきりしないダムが完成し、今だ計画中のダムもあります。また山脈の中央部を貫く道路計画もあります。(図)

他の長大山脈である北・南アルプスと比べてもこれほど東西の道路網が整備されているところはありませぬ。

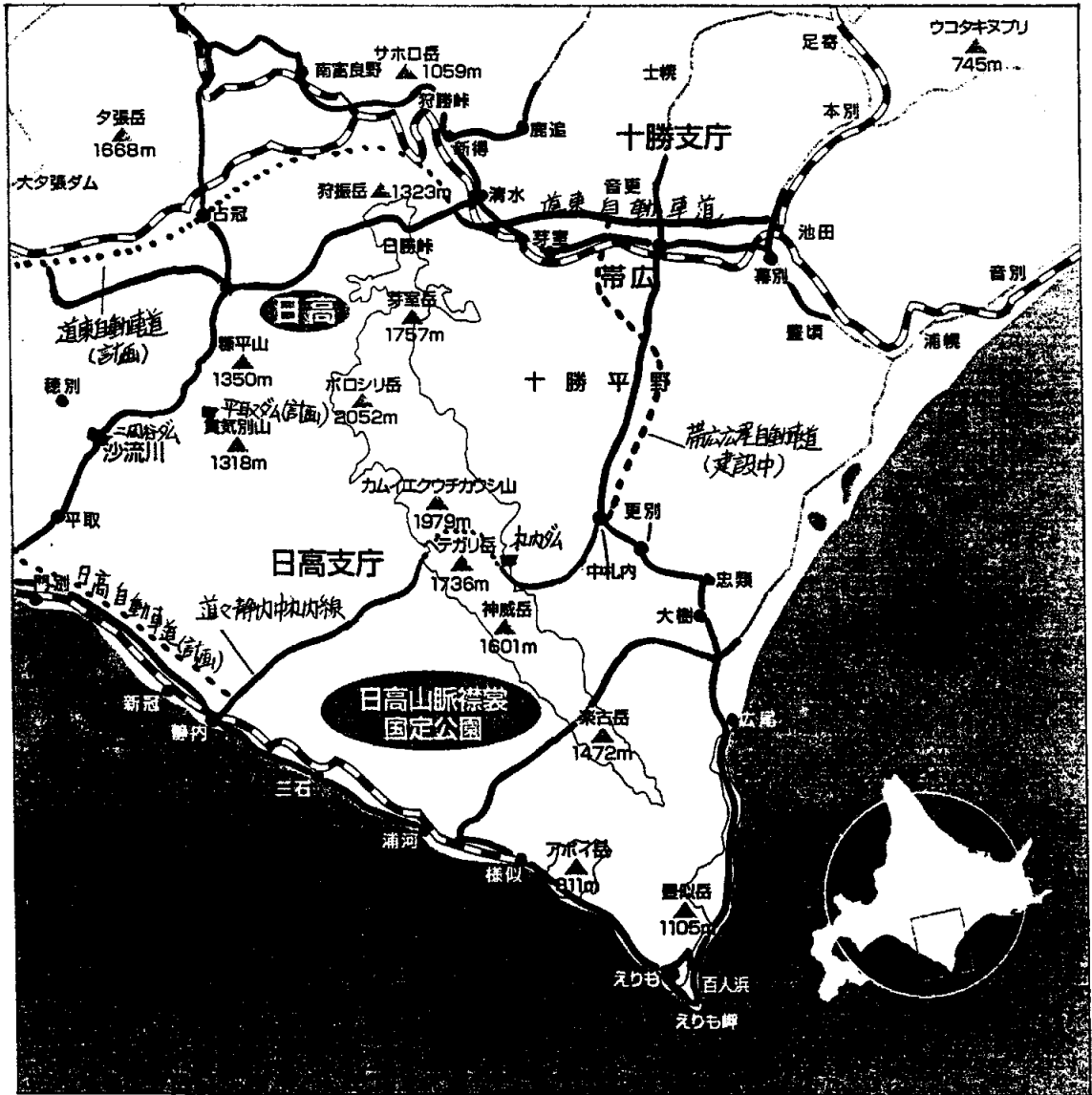
いづれも長大な山脈は生活・経済・行政圏の境界線となっており、主要な物流ルートさえあればよく、東西にある自治体をひとつひとつ道路で結ぶ必要性がまったくないからです。

### 3 日高山脈ファンクラブの活動

#### (一) ファンクラブの設立

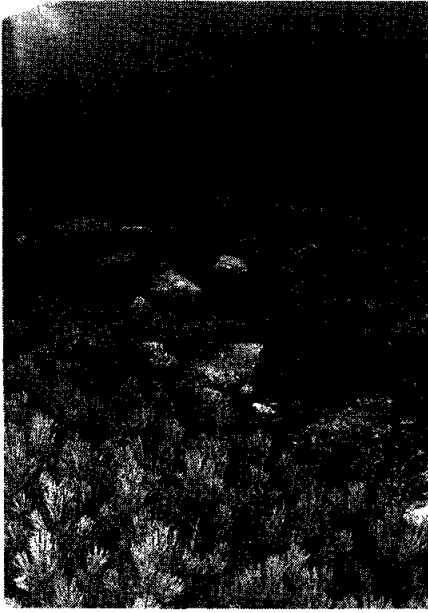
このように開発行為がすすむ自然を毎日眺めながら「このままだと自然はどうなってしまうのだらう」という不安感かられながら生活していました。そのような中で山の仲間や地域の博物館建設に絡んで知り合った若い研究者など一〇人と共にファンクラブを立ち上げました。

日高山脈全体図





写真④ ポロシリ岳のトイレの状況①  
登山道脇のちょうどいい窪みにティッシュが点在している



写真⑤ ポロシリ岳のトイレの状況②  
頂上付近にはティッシュが高山植物の間に散乱している

近年まで日本の残された秘境と呼ばれていた日高山脈は奥地まで開発が進み、さらに全国的な百名山ブームなどにより登山者が急増し高山植物の盗掘や登山者の排泄が問題視されるようになってきました。

さらに21世紀を目前に控え、この日高山脈をどう次世代に伝えていくのか日高山脈の山懐に住み、山脈を愛する者として考え行動する必要性を痛感しています。

そこで日高山脈を愛するあらゆる人びとがみずから発想し、ともに学びあい行動する市民団体としてファンクラブを設立しましょう！

このような呼びかけにより二〇〇〇年五月二十七日には設立総会を十八名の参加者で行う事ができました。(二〇〇〇年十二月現在、一般会員六十名・家族会員四家族)

(一) ファンクラブの活動  
今まで以下のような活動をしてきました。

二〇〇〇年五月

第一回学習会—日高の自然とエコツアーズム(十五名参加)

- ① 日高の里山ウォッチング(案内・熊井康子さん/エコ・ネットワーク)
- ② 日高山脈とエコツアーズム(講師・宮本英樹さん・北海道のエコツアーズムを考える会)

二〇〇〇年七月

ポロシリ岳幌尻山荘周辺の水質調査と登山者意識調査実施。(三名参加) 登山者意識調査アンケート用紙を幌尻山荘に設置。

二〇〇〇年九月

ポロシリ岳調査登山実施(十六名参加) ポロシリ岳登山道の清掃、状況確認、幌尻山荘周辺の水質調査、アンケート用紙



写真⑥ 調査登山参加者—手にゴミ袋



写真⑦ 梶尻山荘周辺の水質調査風景①  
山荘の飲料水と排水・屋外トイレ下の沢水について調査



写真⑧ 梶尻山荘周辺の水質調査風景②  
このようにバックテストを使って調査

をしました。  
川の増水で調査に行けなかったり、アンケートの回答率が低かったりなどの問題はありますが、方法などを改良して今後継続して実施し、山岳環境整備の基礎資料として役立てていきたいと思っています。

(三) これからの

ファンクラブ

これからも単なる開発に対する反対運動ではなく、「日高山脈をどう次世代に引継ぐのか」ということを会員がともに体験し、考え、学び、行動するなかから答えを見つけ出せるような活動をしていきたいと考えています。

そのための調査や学習登山、エコツアーやエコミュージアム、世界遺産といった幅広い視点から山を見つめ直していきます。

日高山脈を共有する十勝・日高の住民がもっと関心を持って欲しいのですが、急がずだんだんと輪を広げていければと思います。行政に依存することなく「市民」としてできることは何か、住民・登山者・研究者が、手を組んで活動をしています。まだ出来たての若いクラブです。みなさんもうっしょに活動をしてみませんか。

を回収。「写真⑥」

学習をふまえて、実際に体験し実感し考える事を基本にして活動をしてきました。

今年のメインの活動は、梶尻山荘周辺での水質調査と登山者の意識調査を実施したことです。

水質調査は、全国規模で実施されている「山のトイレさわやか運動」(田部井淳子氏代表・道内窓口は北大農学部のアノ哲也氏)の一環であり、天候・気温・水温・EC・アンモニア性窒素・硝酸性窒素・亜硝酸性窒素・COD・大腸菌・水量について調査をしました。「写真⑦」「写真⑧」

登山者の意識調査は、大雪山などで行われている意識調査を参考に作成しました。基本的属性・登山行程・楽しみにしている場所と内容・体験の状況・不快に感じる限界・オーバーユース・トイレとゴミの調査項目について梶尻山荘に設置したアンケート用紙に記入してもらう方法で実施

